

絵本を題材にした幼児対象の対話型劇場実践「にじいろのおともだち」を通して

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

猪田 愛里	(水色)
牛島 悠	(黄色)
川野 真理奈	(紫色)
河野 夢愛	(青色)
北村 惺七	(赤色)
左藤 花梨	(ピンク色)
朝長 優	(オレンジ色)
中島 春菜	(黒色)
博田 希颯	(白色)
古川 真裕	(緑色)

第1章 実践の概要と背景

1.1 実践企画の概要と目的

研究テーマを基に、それぞれの役割や表現内容を深め、劇にどのように生かすかを考えるところから準備が始まった。10月2日には題材となる絵本について話し合いを行い、複数の候補の中から『クレヨンのくろくん』を選んだ。この絵本には、色の違いという個性を認め合い、誰もが大切な存在であることを子どもに伝えられる魅力があると感じた。話し合いを重ね、クレヨンたちが協力して虹を描く展開を取り入れることにした。また、ステージに上がることを恥ずかしいと感じる子どもにも寄り添い、座ったままでも参加できるようにクレヨンが紙を配る工夫を行った。言葉だけでなく、動きや音楽も取り入れ、子ども一人ひとりが安心して参加できる劇づくりを目指した。

(川野真理奈, 左藤花梨)

1.2 題材『くれよんのくろくん』の特徴と教育的ねらい

絵本はそれぞれの色の個性とくろくんの個性、多様性などのテーマがある。クレヨンというものは赤、青など多くの色があり、それぞれの色に良さや特徴がある。物語の中でくろくんは自分の色の良さ、役割に気づくことができた。また、物語の途中でくろくんが色を塗ることで絵が台無しになってしまう。その後の場面では、くろくんの描いた黒い絵に他の色が花火を描く。そのためこの場面を通して、相手を認め合うこと、協力して一つのを完成させることの大切さや、1人のアイデアを発展させてさらに良い作品を作るという発想力を育てることもできる。

そして主人公のくろくんの自分の色の個性に自信を持つという成長や他の色達との関係性をテーマにしていると感じた。教育的ねらいについては、絵本の内容を通じて、どんな特徴や個性もみんなで認めて合うというねらいがあると考えられる。そして、みんなで協力することでそれぞれの個性を目立たせることにも繋がる。

(古川真裕)

1.3 準備過程のチーム運営と役割分担

劇に向けた準備過程では、チーム全体で共通のねらいを明確にし、円滑な運営と公平な役割分担を意識して取り組んだ。進行表を作成することで全体の流れや各自の担当、準備状況を把握しやすくなり、作業の偏りを防ぎながら協力して準備を進めることができた。脚本構成、音楽、身体表現、小道具や舞台装飾などは個人のテーマや得意分野を生かして分担し、不足している部分は互いに補い合った。意見の違いが生じた場面もあったが、話し合いを重ねることで共通理解が深まり、より良い表現へとつなげることができた。リハーサルでは動きや立ち位置、タイミングを確認し合い、チームで高め合いながら一体感のある劇づくりができた。

(全員)

第2章 企画・準備過程の詳細

2.1 遊びの展開と物語の流れの設計

舞台の上手と下手から、それぞれ4色のクレヨンが元気よく登場する。互いの存在に気づかず進んでいくと、舞台の中央で「ドン！」とぶつかってしまう。驚いたクレヨンくんたちは周りを見渡し、まだ揃っていない仲間（クレヨンくん）を、呼んでみる。しかし誰も来な



いため、客席の子どもたちと一緒に「クレヨンくーん！」と大きな声で呼んで集める。客席からの声に導かれるように、残りのクレヨンたちが次々と登場し、全部で10色のクレヨンが舞台に揃う。全員が揃ったのを確認したあと10色のクレヨンが自分の色や好きなこと、得意なことなど、個性あふれる紹介をし、会場は明るい雰囲気包まれる。

その後、クレヨンたちは自分たちが描いてきた絵を見せ合い、それぞれの絵に対して感想を言い合う。黒くんの絵が寂しそうに見えたことから他のクレヨン達で協力して絵に色を重ねていく。黒くんの描いたパンダの絵に、赤や青、黄色などさまざまな色が加わり、次第に生き生きとした素敵な絵へと変わっていく。これは、みんなの色が合わさると、もっと絵が素敵になるという気づきを促す。そこで黒くんが「今度は、すっごく大きい絵をみんなで描い



てみない？」と提案する。クレヨンたちは賛成し、会場の子どもたちをステージに招く。事前に枠組みを作った大きな模造紙に、好きな色のクレヨンを使って色を塗ってもらう。ステージ上で模造紙に絵を書いてもらうだけでなく座っている子供たちに画用紙を渡しクレヨンを使って自由に絵を書いてもらう。それぞれが思い思いの絵を描く時間を設ける。子供たちが書いた画用紙をステージ上で紹介する。制作中には、歌「どんな色が好き」をみんなで歌い、自分の色が出てきたらジャンプするなどの身体表現を促す。



歌の途中ではそれぞれの色パートの間で会場の子ども達に「みんなー赤い果物って何があるかな？」などの質問をする。最後の全部の色を歌う前にじゃんけん列車をする。そして、盛り上がりの中で歌った5人は一度下手にフェードアウトする。また、描いている様子はプロジェクターで映し出し会場全体で制作の過程を楽しむ。塗り終えた子どもたちを席に戻した後、みんなで作った大きな絵を披露する。絵は虹の形に完成しており、クレヨンたちは子どもたちに感謝を伝え、協力によって素敵な虹が描けたことを喜ぶ。全員で歌「虹」を歌う（手話を取り入れる）。クレヨンたちは、「これからも色々な色でいっぱい毎日になりますように！」と願いを込めて締めくくり、子どもたちに感謝を伝えて退場する。

(川野真理奈)



2.2 造形制作物の設計と制作の実際

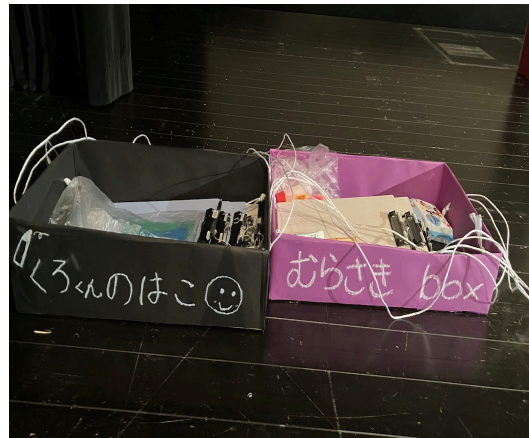
劇における造形制作物は、『くれよんのくろくん』の物語の世界観が子どもたちに分かりやすく伝わり、安心して活動や表現に参加できるよう意図して設計・制作を行った。物語の設定や展開から世界観がずれないことを大切に、導入から終盤まで一貫した視覚的な工夫を行うことで、子どもが自然と物語の中に入り込めるようにした。

導入で4色のクレヨンが登場する場面では、それぞれのクレヨンが何をしているのか、何を持っているのかを子どもたちがイメージしやすいよう、大きな画用紙を持って表現した。視覚的に分かりやすくすることで、登場人物への理解が深まり、物語への興味を引き出すことにつながった。その後、すべてのクレヨンが集まる場面では、誰がどの色のクレヨンなのか一目で分かるよう、色付きのクレヨンをイメージした衣装や帽子を制作した。中に着る服は全員黒で統一することで色の違いがより際立ち、視認性が高まるよう工夫した。



また、他のクレヨンを呼びかける場面では、あえて全員がそろっていない構成にすることで、「誰がいないのか」を子どもたち自身が予想しながら楽しめるようにした。クレヨンの自己紹介の場面では、それぞれの色から想像したキャラクター設定を考え、好きなものや動きを取り入れた表現を行った。さらに、背景には色に合わせたライトを使用し、舞台全体からも何色のクレヨンなのかが分かるようにすることで、視覚的な理解をより深めることができた。

クレヨンたちが描いてきた絵を見せ合う場面では、ステージ後方や客席からでも見えるよう、イラストの大きさや色のコントラストを意識して制作した。線を太くし、はっきりとした色を使うことで、物語の展開が視覚的に伝わりやすくなった。絵を舞台装置として固定するのではなく、演者自身が持ち上げて見せる形にしたことで、「見せ合う」という物語の設定が自然に表現できた。



クレヨンを入れる箱については、舞台上での出し入れがしやすく、劇の流れを妨げないことを重視して制作した。軽くて扱いやすい大きさにし、色分けを行うことで整理しやすくした。さらに、虹を描く参加型の場面では、活動する子どもや関わる大人がすぐにゴミを処理できるように、それぞれのクレヨンの色に合わせたポシェットを作成した。これにより活動が滞ることなく、スムーズな進行につながった。

子どもたちと一緒に描く虹の画用紙は、模造紙を複数枚つなげ、ステージの後方にいる子どもからも見える大きさを意識して準備した。また、客席の子どもたちにも色画用紙とクレヨンを配り、描いた絵を虹に貼り付けることで、全員で一つの作品を完成させる構成とした。配布の際も、それぞれの色に合わせた箱を用意し、見ているだけでも楽しめるよう工夫した。

さらに、ステージの左右端には大きなクレヨンを画用紙で制作して配置し、舞台全体が絵本の中の世界のように感じられる空間を演出した。これらの視覚的な造形物を取り入れることで、子どもたちは物語の世界観を理解しやすくなり、安心してそれぞれの役割を果たす姿が見られた。造形制作物は、劇の表現を支える重要な要素として、子どもの理解や意欲、そして楽しさを高める役割を果たしていた。

(河野夢愛, 猪田愛里)

第3章 表現活動の実際と専門的考察

3.1 ことば・対話の展開と即興性の考察

舞台上で絵を描く活動では、子どもたちが安心して参加できるように、積極的な声掛けを大切にした。まず、絵を描きたいと思った子どもが自然とステージに来られるように、「おいでおいでー!」「おいで一、一緒に描こう!」と温かく呼びかけ、参加へのハードルを下げることを意識した。また、活動中に子どもが不安そうな様子を見せた際には、「どんなふうに塗ってもいいんだよ」「わー!って大きく塗ってみてもいいよ」と具体的に伝え、自分なりの表現を楽しめるよう援助した。その結果、最初は戸惑っていた子どもも次第に大きくなるのびのびと塗り始め、自信をもって表現する姿が見られた。

活動の導入として歌った『どんな色が好き』では、5色のクレヨンそれぞれが問いかけと応答を行い、色ごとに質問内容や返事を変える工夫をした。赤のクレヨンは「赤色の果物ってなにがある？」と問いかけ、りんごやさくらんぼといった意見が出ると、「みんな教えてくれてありがとう！」と感謝を伝えた。青は「青色の生き物ってなにがいるかな？」と問い、くじらやくらげなどが挙がると「色んな生き物がいたね」とまとめた。黄色は「どんなものがある？」と問いかけ、カレーパンなど食べ物が出ると「食べ物がいっぱいあるね」と応じた。緑は「どんな食べ物があるかな？」と聞き、ピーマンやきゅうりに対して「みどりはお野菜がいっぱいだね」と返した。ピンクは「どんなかわいいものがあるかな？」と問い、ハートやリボンが出ると「たくさんかわいいものがあったね」と応答した。このように色ごとに世界観を持たせることで、子どもたちは想像を広げながら楽しく参加していた。



虹を描く場面では、「何色で描く?」「ここにもいっぱい描いていいよ」と声を掛け、子ども自身が考え、選び、表現する過程を大切にしました。また、「みてみて!上手にかけた!」と声を掛けてくれた子どもには、「わー!上手にかけたね!」と共感的に応じ、達成感や喜びを共有しました。終わりの際には、「そろそろおしまいにしようね」「これで手を拭こう」と見通しを伝え、片付けを手伝ってくれた子どもには「手伝ってくれてありがとう」と感謝を言葉にした。



虹を描く活動中、ステージに上がらなかった子どもが退屈しないよう、緑のクレヨンが客席の子どもたちに「今日は何食べたの?」「お友だちの好きな色はなに?」と問いかけ、言葉のキャッチボールを行った。これにより、見るだけの子どもも活動に参加している感覚を持つことができた。また、客席の子どもが描いた絵を受け取り、「見てみてー!こんな絵が描けたよ」と紹介し、描いた動物や内容に反応することで、子どもの表現を認め合う場面をつくった。

さらに、『どんな色が好き』を歌う際には、色ごとにダンスや動きを取り入れた。特に緑のクレヨンには、持っているクレヨンを大きく振ったり回したり、下向きにして描く動きを見せることで、視覚的に楽しめる表現を行った。歌の途中の「色、色、色、色…」の部分では、前に立つ5人が2人と3人に分かれてじゃんけんを行い、勝敗を予測する楽しさを取り入れた。このような動きの工夫によって、歌の中にも変化や面白さが生まれ、観客席の子どもたちも集中して見る姿が見られた。



また、プロジェクターを使って進行状況を見せることで、今どこまで進んでいるのかを子どもたちと共有でき、応援する気持ちや一体感を高めることができた。最終的に、ステージ上と客席の子どもたちがそれぞれの形で関わり、みんなで一つの虹を完成させることができた。この活動を通して、声掛けや表現の工夫によって、全員が参加し、協力して作り上げる楽しさを感じられる実践になったと感じた。

(博田希颯,朝長優,左藤花梨,古川真裕)

3.2 音楽表現（歌唱・伴奏）の活用と子どもの参加

本劇では、物語の中に音楽表現を取り入れることで、子どもたちが世界観に親しみやすくなり、主体的に参加できるよう工夫されていた。特に、虹を描く場面や完成後の展開では、歌や伴奏が効果的に用いられ、視覚と聴覚の両面から楽しめる構成となっていた点が印象的である。

虹を描いている場面では、高音でゆっくりとした静かな伴奏が流れ、会場全体に落ち着いた雰囲気をもたらしていた。この音楽によって、絵を描いている子どもも、座って見ている子どももリラックスしながら過ごすことができ、静かになりすぎることなく物語に集中しやすい環境が作られていたと考えられる。音楽があることで場の空気が保たれ、子どもたちが自然と物語の世界に入り込めていた。



また、音楽表現を取り入れたことで、物語の流れや場面転換が分かりやすくなっていった点も大きな効果である。言葉だけで説明するのではなく、場面に合った歌や伴奏を用いることで次に何が起こるのかを子どもたちが自然と感じ取ることができていた。

さらに、子どもたちをステージに招く場面や一緒に虹を描く場面でも音楽が流れていたことで、緊張感が和らぎ、安心して参加できる雰囲気を作られていたように感じる。音楽が参加への不安を軽減し、「やってみたい」「一緒にやりたい」という気持ちを引き出していたのではないかと考えられる。

『どんな色が好き』の歌では、色と物、言葉を結びつけて考えることができ、子どもたちの想像力や表現力を刺激する機会となっていた。自分の好きな色だけでなく、他の色にも目を向けるきっかけとなり、色の多様さを楽しく知る経験につながっていた。また、好きな色のときにジャンプをするという参加方法を取り入れたことで、子どもたちはより積極的に関わり、歌を通して一体感が高まっていた。

虹が完成した後は、大きな虹の絵を観客に見せながら「にじ」を歌ったことで、物語のクライマックスとしての盛り上がりが生まれていた。完成した虹を視覚的に楽しみながら歌を聴くことで、色の美しさや物語の余韻を感じることができ、印象に残る場面となっていた。また、手話を取り入れた歌唱により、「聴く」「歌う」だけでなく、「見る」「真似する」「体を動かす」といった多様な関わり方が生まれ、子どもから大人まで参加しやすい音楽表現となっていた。

このように、歌や伴奏、手話を効果的に取り入れることで、物語の世界観がより豊かに伝わり、子どもたちが安心して自然に参加できる劇となっていた。今回の発表を通して、音楽表現は場の雰囲気を作るだけでなく、子どもたちの集中力や参加意欲を高める有効な手段であると感じた。今後の保育においても、目的を意識した音楽の活用を大切に、子どもの気持ちに寄り添った援助を行っていきたいと考える。

(全員)



3.3 身体表現と動きの工夫（登場・ジャンプ・描く）

本活動では、絵本『クレヨンのくろくん』の物語をもとに、色の特徴や物語の展開を身体表現で分かりやすく伝えることを目的として劇を行った。色ごとのイメージを大切に、一人ひとりが動きやポーズを工夫することで、視覚的に楽しめる表現を目指した。物語の始ま

りでは、紫・ピンク・青・黄色の4色が登場し、スキップする動きと走る動きに分かれて舞台上でぶつかり合い、そこから散らばる大きな動きを取り入れた。この演出により、子どもたちの注意を一気に引きつけ、物語の世界に自然と入り込めるよう工夫した。

その後登場するクレヨンたちも、それぞれの色のイメージに合わせて動きやポーズを考えた。赤色は腕を大きく広げた元気な動き、黄色は星のようにキラキラした表現、青色は海をイメージしたゆったりとした動き、ピンク色はハートのポーズ、紫色はブドウを表すなど、色の特徴が一目で分かるようにした。登場の仕方にも工夫を加え、上手・下手から色の特徴が伝わるように演出した。



自己紹介の場面では、「僕は黒クレヨンのくろくん、みんなの色を混ぜると僕の色になる」といったように、自分が演じる色を分かりやすく言葉で伝え、うえで、一歩前に出て色に合った決めポーズを行った。動きと台詞を組み合わせることで、子どもたちが楽しみながら色を理解できるようにした。黒色の場面では、全員が集まり、他の色を混ぜる動きを取り入れることで、「みんなの色を混ぜると黒になる」という物語の意味を身体で表現した。

また、『どんな色がすき』の歌では、音楽に合わせて身体や腕を大きく動かし、子どもたちにもジャンプや身体の揺れで参加するよう促した。学生自身も一緒に動くことで、子どもたちが安心して真似できる雰囲気をつくった。

終盤の虹を描く場面では、大きな模造紙を用意し、壇上に上がった子どもたちに好きな色のクレヨンで虹を描いてもらった。客席の子どもたち一人ひとりに色画用紙とクレヨンを渡し、自由に絵を描いてもらうことで、全員が参加できる活動とした。さらにカメラを使用し、客席からも様子が見えるよう工夫した。全体を通して、難しい動きではなく、色のイメージを大切にしながらシンプルな身体表現を取り入れたことで、物語の楽しさや色の魅力を分かりやすく伝えることができた。また、自分たちが楽しんで表現することで、その楽しさが子どもたちにも伝わり、「やってみたい」「まねしてみたい」という気持ちを引き出すことができたと感じている。

(牛島悠、北村惺七、中島春菜)

第4章 子どもの姿と学びの考察

4.1 参加型造形活動（色塗り）における子どもの主体性

本劇『くれよんのくろくん』における参加型造形活動では、物語のクライマックスである「虹を完成させる」場面を中心に、ステージ上と客席が一体となって造形表現に関わる構成を取り入れた。単に劇を鑑賞するのではなく、子どもたち自身が表現者として関わることで、物語の世界観をより深く共有し、「みんなで作る劇」となることを目的とした活動で

ある。ステージ上では、大きな画用紙に描かれた、まだ色のついていない虹を用意し、子どもたちを招いてクレヨンで色を塗りながら少しずつ完成させていった。普段あまり使うことのない大きな画用紙に描くことで、腕を大きく動かしたり、体全体を使って表現したりする姿が見られ、造形活動の中で身体的な表現の楽しさも味わえる場となった。子どもたちは「どんな色が好き」の歌に合わせて色を選んだり、近くにいる学生やクレヨン役の発表者に自分の描いたものを見せたりと、周囲との関わりを楽しみながら活動に参加していた。

一方、客席にいる子どもたちや保護者にも造形活動に参加してもらうため、それぞれの色の画用紙とクレヨンを配布した。舞台上の活動と同時に描けるようにすることで、「見る側」と「演じる側」を分けるのではなく、全員が同じ時間を共有しながら表現に関わることを大切にしたい。描く内容については細かい指示を行わず、虹の色塗りに限らず、キャラクターや好きなイラストなど、子ども一人ひとりがイメージしたものを自由に描けるよう配慮した。

その結果、さまざまな色使いや表現が生まれ、子どもたちの個性があらわれた作品が多く見られた。完成した小さな画用紙の作品は、最後にステージ上の大きな虹の足りない部分に貼り付け、全員で一つの作品を完成させた。自分の描いた絵が舞台上の作品の一部になることで、子どもたちは達成感や参加意識を感じることができ、劇の世界に主体的に関わる経験となった。舞台と客席が同じ造形活動でつながることで、劇全体の一体感が生まれたと感じられる。また、活動をより楽しめるように、いくつかの工夫も行った。黒クレヨンと紫クレヨンの役の学生が画用紙を配る際には、それぞれの色が一目で分かるよう、色付きの箱やクレヨンを用意したことで、物語の世界観を壊さずに活動へとつなげることができた。さらに、ステージ上の虹の様子は客席から見えにくいという点を考慮し、携帯電話で活動の様子を撮影し、その映像をモニターに映して共有した。

これにより、今どのように虹が完成していつているのかを客席の子どもたちや保護者も確認でき、完成への期待感を高めることにつながった。一方で、モニターには主に手元の様子が映されていたため、子どもたちの表情や感情の動きが十分に伝わらなかった点は今後の課題として挙げられる。活動の進行状況や完成への過程を視覚的に共有する点では有効であったが、子ども一人ひとりの喜びや達成感といった内面的な育ちを表情から捉えるという点では、十分とは言えなかったと考えられる。しかし、ステージ上に立った子どもたちは、大きな画用紙に思いきり描く楽しさを感じたり、自分の表現を周囲と共有しようとしたりする姿が多く見られたことから、感覚を通して気持ちを表現し、人と関わろうとする力が育まれている様子が見ええた。このように、ステージ上での造形活動と客席での活動を組み合わせることで、誰もが完成に向けて参加できる構成となった。表現の場を舞台上だけに限定せず、客席の子どもたちも含めて工夫したことで、劇全体が「みんなで作る表現活動」となり、子どもたちにとっても印象深い経験になったと考えられる。

(河野夢愛,猪田愛里)



4.2 音楽や動きを通じた一体感と学びの深化

音楽と身体表現を組み合わせることで、劇全体に一体感が生まれ、子どもたちが自然と物語の世界に入り込める雰囲気をつくることができた。歌やピアノの音が流れることで場面の切り替わりが明確になり、子どもたちは次に何が起こるのかを期待しながら、集中して劇を見ている様子が見られた。音楽は物語の流れを支える役割を果たし、言葉だけでは伝えきれない場面の变化や気持ちを、子どもたちに分かりやすく示していたと感じる。また、音楽に合わせて手拍子をしたり、体を揺らしたりする身体表現を取り入れたことで、子どもたちは登場人物の動きや感情をまねしながら理解し、劇を「見る」だけでなく「一緒に体験する」形で受け止めていたように感じられた。特に、「どんなものがあるかな?」「～をしたいんだけど、手伝ってくれる?」といった学生からの問いかけに対し、子どもたちが声を出して答えたり、身体を動かして反応したりする姿が多く見られたことから、子ども一人ひとりが観客としてではなく、劇の登場人物の一員として参加できていたことが分かる。このような関わりは、子どもたちの主体性を引き出し、物語への理解や興味をより深めることにつながった。さらに、ピアノの音が加わったことで、問いかけの場面や一つの絵を完成させる場面では、子どもたちが「やってみよう」「参加したい」と感じやすい環境づくりができていたと考えられる。音楽があることで活動への入り口が自然に生まれ、子どもたちが安心して反応できる雰囲気がつくられていた。音楽に合わせて身体を動かす表現を通して、「みんなですると楽しい」「一緒に取り組むと嬉しい」「ワクワクする」といった気持ちを、子どもたちは感覚的に理解していったのではないかと感じた。一方で、演じる側にとっても、音楽や動きを取り入れたことは大きな意味をもっていた。セリフだけで進行する劇では、それぞれが自分の役割に意識が向きやすいが、音楽が加わることで場の雰囲気が共有され、全体の流れを意識しながら表現することができた。音楽のテンポや強弱に合わせて動くことで、自然と呼吸やリズムがそろい、個々の表現が一つのまとまりとして成立していったと感じる。また、動きを取り入れたことで、言葉だけでは表現しきれない感情や場面の变化を、身体全体で表すことが可能になった。動作をそろえたり、タイミングを合わせて移動したりする中で、周囲の動きをよく見て行動する必要性が生まれ、自然と仲間の存在を意識するようになった。その結果、互いに気を配りながら表現をつくり上げる姿勢が育まれ、チームとしての一体感がより高まったと感じている。さらに、音楽と動きには緊張を和らげる効果もあった。特に練習初期には恥ずかしさや不安から動きが小さくなる場面も見られたが、音楽が流れることで動き出しやすくなり、楽しみながら参加する様子が増えていった。楽しさを共有できたことが、場の雰囲気を明るくし、積極的な関わりへとつながったのだと考えられる。このように、音楽や身体表現を通して気持ちや場面を表現することで、言葉による説明だけでは伝えきれない思いを、子どもたちに分かりやすく届けることができた。音楽や動きは子どもの興味を強く引きつけ、心に残りやすい要素であるため、物語の理解を深めるとともに、友だちとの関わりや協力の大切さを学ぶ上でも、大きな学びにつながるきっかけになったと実感している。

(牛島悠,川野真理奈)

第5章 まとめ（総合的評価と省察）

5.1 省察と今後の課題(猪田 愛里)

今回の劇では『くれよんのくろくん』の絵本をもとにして、視覚だけではなく聴覚、触覚などを刺激して、音楽表現・造形活動・参加型の構成を取り入れることで、子ども一人ひとりが物語の世界に関わりながら主体的に楽しめる活動となった。自己紹介を終えて、黒クレヨンの色塗りを完成させる時で、それぞれの色の個性や特徴を表現し、違いを認め合う大切さを伝えることが足りなかったのではと感じる。虹を描く参加型造形活動では、舞台上だけでなく客席の子どもたちも作品づくりに関わることができ、虹を自分の表現が物語の一部になる経験は、子どもたちの興味・意欲・達成感を高めるきっかけとなったと考えられる。今回の活動では、虹を描く場面を携帯で撮影する役割を担当したが、ただ虹を映すだけになってしまった点が反省点である。描いている途中の子どもの表情や、クレヨンの動き、描かれているイラストを大きく映すなど、子どもの表現そのものがより伝わる撮り方ができたのではないかと感じた。また、保護者の視点を意識すると、完成した虹だけでなく、「どんな思いで描いているのか」「どんな表現を楽しんでいるのか」が伝わる映像にすることで、モニターをより楽しく、温かく見ることができたのではないかと考える。

5.2 省察と今後の課題(牛島 悠)

今回劇を終えて、子どもたちに意欲的に参加してもらうためには、分かりやすい構成と面白いと感じる表現、そして安心して関われる雰囲気づくりが重要であることを学んだ。「クレヨンのくろくん」を題材に、自分たちで一から構成や表現方法を考え、実践したことで、子どもの視点に立って活動を組み立てる難しさや大切さを実感した。準備段階では、グループ全員で作業を行ったことで作業量の偏りが少なくなり、情報共有も円滑に行うことができた。初めは意見のすり合わせに難しさを感じる場面もあったが、活動を重ねる中で徐々に連携が取れるようになり、動線や小道具など細部にまで目を向けてこだわりながら準備を進めることができた。その結果、一体感のある劇につながれたと考える。身体表現では、それぞれの色のイメージが伝わるよう、分かりやすく、かつ子どもが楽しいと感じられる表現を意識した。本番直前まで修正と確認を繰り返し、限られた時間の中で大きな虹を完成させられるのかという不安を抱えながらも、成功させるために全員で努力した。実際に完成した虹を目にしたときには、大きな達成感と嬉しさを感じることができた。本番では、ステージが上がって虹を塗る子や、学生の動きを真似しながら身体を動かす子など、積極的に参加する姿が見られた一方で、周囲の様子を見ながら少し距離を保って関わる子もいた。また、塗りたい気持ちはあるものの、塗る場所がないといった状況も想定されたため、席に座ったままでも楽しめるよう画用紙を用意し、絵を描いてもらう工夫を行った。このように、会場にいる子どもだけではなく、全ての観客が自分なりの関わり方で楽しめる環境を整えられた点は良かったと感じている。観客席にいた人だけでなく、演じる側である私たち自身も楽しみながら取り組むことができ、活動全体がより一体感がより高まったと感じている。だが、練習量が十分でない場合には、想定外の場面に対して即興的に対応することが難しいという課題も見えた。今後は、さまざまな視点から子どもの反応を想定し、事前準備をより丁寧に行うことで、臨機応変に対応できる力を身につけていきたい。

5.3 省察と今後の課題(川野 真理奈)

今回、実際に劇を行ってみて、物語の流れを崩さずに子供たちにどのように参加してもらうかを考えることが、とても難しいと感じた。ただ見ているだけの観客ではなく、物語の世界の一員として関わってもらうために、私たちはさまざまな工夫を行った。その一つが音楽の活用である。場面に合った音楽を流すことで雰囲気をつくりやすく伝え、子供たちが自然と物語の世界に入り込めるようにした。また、実際に子供たちをステージに呼び、一緒に動いたり反応してもらったりすることで、より主体的に参加できるように意識した。劇の中では、言葉だけで伝えることが難しい場面も多くあったが、動きや表情を大きく使うことで感情や状況を表現することができた。子供たちは登場人物の動きや表情をよく見て反応してくれ、言葉がなくても気持ちが伝わることを実感した。一方で、本番では練習通りにいかない場面もあった。子供たちの予想外の反応や動きに戸惑うこともあったが、その場の雰囲気に合わせて対応することで、結果的にとても楽しく、心に残る劇にすることができたと感じている。完璧ではなかったものの、全員で協力し、その場を大切にすることで「最高の劇」になったと思う。今後の目標としては、本番でのアドリブ力を高めることや、常に子供たちの視点に立って考えることを意識していきたい。子供たちが何に興味を持ち、どのような関わり方を求めているのかを考えながら、より楽しんでもらえる表現活動に取り組んでいきたい。

5.4 省察と今後の課題(河野 夢愛)

今回の劇では、音楽表現や造形活動、参加型の構成を取り入れることで、子ども一人ひとりが物語の世界に関わりながら表現を楽しめる活動となった。衣装や小道具、舞台装飾を工夫したことで、登場人物や場面の变化が視覚的にも分かりやすくなり、劇の流れや場面の意味を理解しやすかった点は成果である。また、虹を描く参加型造形活動を通して、舞台上だけでなく客席の子どもたちも劇に関わることができ、全体で一つの作品を完成させる構成にすることができた。見るだけでなく、自分の表現が物語の一部になる経験は、子どもたちの興味や意欲を高めるきっかけになったと考えられる。今回の活動を通して、劇は「見せる」だけのものではなく、子どもが関わり方を選びながら参加できることで、より深い学びや満足感につながることを学んだ。一方で、客席での子どもたちの様子を十分に把握することが難しく、活動の進め方や時間配分が適切であったかについては振り返る必要があると感じた。また、参加方法や活動内容が分かりにくかった子どもがいなかったか、年齢差や理解の程度への配慮が十分であったかも今後の課題である。今後は、事前に活動の流れをより分かりやすく伝える工夫や、参加の仕方を複数用意することで、一人ひとりが安心して関われる表現活動を実践していきたい。

5.5 省察と今後の課題(北村 惺七)

活動では、「クレヨンのクロくん」の物語を通して、色への興味や身体表現の楽しさを引き出すことをねらいとした。色ごとにその色っぽい身体表現（ポーズ等）を入れたことにより、よりわかりやすく楽しい物語になり分かりやすくなった。その身体表現は子どもたちには色ごとに決めたポーズを真似したり、自分なりに工夫した動きを考えたりしながら、物語の世界に主体的に入り込む姿が見られた。また、「黒はたくさん色が混ざってできている」という伝え方をしたことで、黒色に対する否定的な印象がなくなり、色の多様性を幅広く

く考えることができたと感じた。細かく歌や身体表現を取り入れたことで、言葉だけでは理解が難しい内容も、劇に参加や体験という形を通して自然に受け止められていた点は本活動の成果であると考えます。また、活動の展開がアドリブで難しい場面があった。子ども一人ひとりの発言や、発想や表現を十分に広げきれなかった場面や十分に受け止めきれなかった場面もあった。今後は、子どもの動きやつぶやきを丁寧に拾い、即興的に活動に取り入れる援助を意識していきたい。また、年齢や発達段階に応じて、表現の難易度や関わり方を調整する必要性も感じた。私たち、私自身の今後の課題として、物語や表現活動を通して、子ども同士が互いの表現を認め合い、安心して自己表現できる環境づくりを目指していきたいと劇を制作や劇の流れ、全てを通して感じた。

5.6 省察と今後の課題(左藤 花梨)

今回の劇は、「みんなで虹を作り上げる！」という最終的な目標があったので、最後に繋げるように考えないといけなかったので大変だった。音楽表現、造形活動、ステージ上に上がる参加をするといった活動をし、子どもたちが楽しく劇を見ることも参加することも出来たのではないかなと思う。音楽表現では、手話を取り入れてみて視覚を刺激することも出来たと思う。また、「どんな色が好き」では、親子同士で「どんな色が好き?」「あたしはピンクー!」などとコミュニケーションを取ることが出来ると感じた。「どんな色が好き」を歌い始める前の虹をステージ上で塗る活動では、席に座っている子どもたちは小さな紙に絵を描くという活動があるけれど、描き終わったらすることが無いので席に座っている子どもたちがもっと楽しいと思えるような活動を考えとかなければいけないと感じた。リハーサルで、実際に虹を塗っている時に、虹を塗っている人達以外がすることないと感じた。だから、本番では「何かをしないと」となった。次の日が本番だったので、一から準備をしようとして当日に間に合わないということで、観客に質問をして暇の無いようにした。だけど、本番は厳しくて、リハーサルよりは暇が少なかったと思うけどもっと楽しませることは出来たのかなと思った。そこが反省点。

5.7 省察と今後の課題(朝長 優)

「クレヨンのくろくん」を元にした「にじいろのおともだち」の劇では、子どもたちも参加できるように、虹を作ったり、虹以外にも紙に好きにお絵描きできるようにしたり、歌の「どんな色が好き?」で声かけなどを行った。また、「虹」の歌で、手話も取り入れることができて、手話を広めるいい機会になったなと思った。また、視覚的にも楽しめるよう、一人ひとり色がわかる衣装や、クレヨンの小道具を作ったりした。また、自己紹介の際に色のイメージをしやすいように、「オレンジクレヨンのオレンジちゃんみかんが大好き」といったその色の物を言って色と物の連想をすることができたのではないかなと思う。ステージに上がる際、どうしていいかわからない子どもに自分から声をかけ、「このように書いてもいいよ」と伝えることが出来た。またステージに上がらなかった子どもたちにもステージの様子がわかるようにスクリーンに様子を映し出したのは、席にいる子どもたちもステージに上がった子どもの保護者も子どもたちの状況がわかって少しは楽しめたり安心することができたのではないかなと思う。反省点では、虹を描くのを終わる時に夢中になっている子どもがいて、その子が納得できるような声かけをすることが出来なかった。次はその子の気持ちを受け止め、その上で終わりを伝えて、区切りをつけるべきだなと考えた。子どもの気持ちを受け止めた上での声かけの仕方を見直すことが自分の課題だなと思った。

5.8 省察と今後の課題(中島 春菜)

今回の物語は、「クレヨンのくろくん」だった。子どもたちにクレヨンで虹を書いてもらうことを目的として、実践を行った。最初の自己紹介の部分は、子どもたちと一緒にポーズをしてもらったり、「クレヨンくん」と呼び掛けてもらったりして物語が始まり、音楽表現や、身体表現を取り入れることで子どもたちも楽しめるような作品になったと思う。また、舞台袖にクレヨンを書いた画用紙を椅子に張り付けたり、衣装をクレヨンにしたことでリアルにクレヨンが表現されていると感じた。自分たちが虹を書くのではなく、子どもも参加できるように虹を書く参加型は良いように思った。舞台上に出ているクレヨンと同じ色を用意して、模造紙の上に書いている虹に、子どもたちの好きな色を使って虹を完成させる参加は、子どもも楽しんでいるように感じた。虹の完成度合いをカメラで見せることで、客席にいるお客さんも子どもたちと完成を見届けることができた。そして、舞台上に上がらない子どもたちに、色画用紙を配り「黒」、「紫」「白」の三色の色で自由に絵を書いてもらったことで、暇にならずに済んだと思う。しかし、子どもだけに書いてもらうのではなく、見に来ている保護者にも書いてもらうべきだと感じた。子どもが書いている横でじっと見ている保護者が多かったから、一緒に参加をして、楽しんでもらうべきだと思ったことが課題だ。皆で綺麗な虹が出来たことは良かったと思う。

5.9 省察と今後の課題(博田 希颯)

「クレヨンのくろくん」の劇を通して、子どもたちが主体的に楽しく参加できるよう、音楽や造形などさまざまな視点から工夫を重ねながら作り上げることができた。くろくんの絵を紹介する場面では、どの色にもそれぞれの個性や特徴があることを伝え、違いを認め合うことの大切さを表現できたのではないかと考える。

制作や練習の過程では、学生同士で意見を出し合い、さらに教員からの助言を受けながら、構成や表現方法、動きのタイミングなどを何度も見直していった。当初は全体の流れが曖昧で、役割分担や場面転換に不安が残る部分もあったが、話し合いを重ねることで一つひとつの課題を整理し、改善していくことができた。このように、他者の視点を取り入れながら修正を行えたことが、劇の完成度を高めることにつながったと感じている。また、最終的に自分たちが完成させたいと考えていた虹を、限られた時間内に描き上げることができた点は大きな成果であった。事前に流れや時間配分を意識して準備していたことで、計画通りに活動を進めることができ、達成感のある終わり方につながったと感じる。一方で、虹を描く場面におけるステージと客席をつなぐ言葉のやりとりについては、話題がやや限られてしまい、広がりや欠けた部分があった。今後は、学生同士や教員からの意見をより具体的に想定し、複数の展開や問いかけを準備することで、その場の状況に応じた柔軟な対応ができる力を身につけていくことが課題である。

5.10 省察と今後の課題(古川 真裕)

「クレヨンのくろくん」の発表を行って、子ども達の自分の好きな色への興味や愛着を劇への参加を通して表現しているのだと感じた。

今回の発表ではそれぞれの色の個性や特徴を自己紹介のセリフや歌などで表現した。それぞれの色が特徴のものを自己紹介の中で言ったり、歌の中で好きな色のタイミングでジャンプをすることを促したり、歌の合間に観客席に向けて色に関する質問をしたりすることによって観客席にいる子ども達の興味を引き出せることができるのだと感じた。歌の中でのジャンプをととても楽しそうにしていたように見えた。ステージの上で絵を描くという場面で

は、子どもの描いた絵に対して、「上手だね」などの反応をすることで子ども達の絵を描くことに対する楽しさが増えるのだと考える。子ども達も積極的に好きな色のクレヨンを持って虹に色を塗ったり、好きな動物など描いたりしてとても良かったと感じた。子ども達が絵を描いている中での観客席への質問については私は途中で何を聞けばいいのかが分からなくなってしまった。子ども達の興味を引き出すための質問を考えることが課題だと思った。「どんな色が好き」の緑クレヨンのパートでは私は全身を使って自分なりの表現ができたと感じた。歌の中での質問では緑の食べ物は野菜の名前を言っていた子が多かった。野菜は緑色のイメージを引き立たせているのだと考えた。

そして、最後に全員で「虹」を歌う場面では、手話も使って虹の美しさや綺麗さを表現できた。この発表を通じて、子ども達に色で表現したり遊んだりすることの楽しさや面白さ、そして様々な考えを持つ人と分かり合うことで、お互いをより良いものにしていくことの大切さを知って欲しいと思った。

